

『インディ・ジョーンズとローレンスの世界へ』

“バラ色の古代都市ペトラと憧れのピラミッド8”

〔JTB〕

添乗員：北村 美登里さん

現地ガイド：サミーさん Sami S.Sahawheh

オマールさん Towfeq Omar

ハトさん（カイロ）

出発 平成 11 年 8 月 11 日（水）

帰国 平成 11 年 8 月 18 日（水）

平成 11 年

8 月 11 日（水）

12 時 15 分過ぎに出発し、日暮里発 12 時 55 分のスカイライナーで成田空港へ向かい、14 時少し前には到着した。QL ライナーでスーツケースを受け取ってから I カウンターに行った。添乗員は北村美登里さん。落ち着いた感じの美人で、学校の先生のような雰囲気があり、バカやったら怒られるかなあ、というのが第一印象であった。

とにかく今回のツアーは、まず行きのフライトを無事にこなせるか、ということが気に掛かっていた。何しろ 20 時間に及ぶ長丁場であり、宗教上の理由からとかで機内ではアルコールが出ないのである。その事に気を取られていたせいか、機内で使用する予定であったブルゾンとスリッパをすっかり忘れてしまって、成田で購入する羽目になってしまった。そして出国手続を済ませた後は、少し緊張しながら生ビールを飲んで時間をつぶした。

16 時少し過ぎにエジプト航空 865 便は離陸した。以前のトルコ航空も機内の装備が充実していなかったけれども、エジプト航空はもっとひどい感じがした。それにちょっと独特のにおい（スパイスか？）が鼻をついた。通路側の席で、かつ右隣がいなかったので、マニラまでの 4 時間は思いのほか楽に過ごせた。

マニラでは一度降り、30 分ちよつとしてから再び搭乗となったが、痩せた中年男が隣に座ってきた。バンコクでも乗客の乗り降りがあり、飛行機のくせにまるで路線バスのような感じであった。中年男は降りてしまい、代わりにバンコクから右の席に座ったのがグレート・ファッティな女性（おばさん）で、それも姉妹なのか二人並んでいたために大変息苦しかった。

例によって行きの機内では期待と興奮、それに今回は圧迫感にもさいなまれてよく眠れず、ツアーの初めはちょっと辛かった。しかし、エスファイト・ゴールドの力で何とか乗り切った。

8月12日（木）

予定よりかなり早めに、現地時間の朝 5 時過ぎにカイロに到着した。機内がだいぶ冷えていただけに、降り立ったときの強い日差しは寝不足の身体にちょっと堪えた。長いフライトであったけれども、マニラとバンコクでの途中休憩の際に体操したり、歩き回ったりしたので、思ったほどしんどくなかった。

空港での両替の際、添乗員さんから、まずは 5 千円くらいが適当との話があったが、両替所では 1 万円しか両替しないとわれ困ってしまった。すると、シリア人という親切そうな青年が僕の両替した半分（5 千円分）を引き取ってくれて、一見落着となった。彼は日立に勤務しており、結婚のために一時帰国する途中であるとのことであった。現在の勤務先は大塚にあって、8 月の下旬頃には再び日本に戻ると言う。別れ際、彼から“こっちの人間はガメツイから注意するように！”とアドバイスされた。結局、5 千円を 147LE に両替することになった。

空港には大型のバスが待っていて、8 名のツアーで大型バスとはさすが JTB、と感心してしまった。空港を出ると、まずはオベリスクが目に入ったが、イスタンブールのローマ競馬場跡にも建っていたのを思い出した。バスの中では北村さんから、トイレのチップは 25～50 ピアストルくらいで、バックシーシと言って物乞いに来る人とは目を合わせないように等の注意があった。また、187m のカイロタワーが近づいてくると、マリオット・ホテルはナイル川の中洲のゲジラ島にあるとか、エジプトの人は自分の決められた仕事しかせず、決して他人の仕事を取らないとか話してくれた。要するに、面倒見がよくないようですね。

マリオット・ホテルはカイロで一番と聞いていたが、なかなか立派で混雑していた。そのレストランでお茶をしてから、観光がスタートした。ガイドはハトさんで、30 歳くらいか？ 学生時代にバスケットをやっていたというだけあって、背が高くガッシリした体格であった。カイロ大学の日本文学科で川端康成を専攻したとのこと。本当は夏目漱石を勉強したかったそうだが、何となく川端康成になってしまい、彼についてはエジプトの熱風に吹き飛ばされて、完全に忘れ去ってしまったと話していた。

彼の話のを要約すると、大体次のようになる。エジプトは約 100 万 km^2 で日本の 2.7 倍で 96% が砂漠であり、2 月の終わりから 10 月までが夏で、あとは一気に冬になるそう。また、湿気が少なく、そのことが数々の遺跡が残った理由であるとのこと。エジプトは元々コプト教（キリスト教）の国であったが、641 年にイスラムが入ってきたという。肥沃な土地を意味するコプトがエジプトになって、さらにエジプトに変化したとのことである。イスラム教は金曜日が休みで、そのお昼にはモスクに言ってお祈りをするということになっているそう。因

みに、イスラム教が 87%、キリスト教が 13%ということである。

おみやげにはパピルスやカルトウーシュ、香水のビン、民族衣装、Tシャツなどが良いと薦めていた。また、例のルクソールの事件以来、年間 9 万人いた日本からの観光客は 98%減少し、ヨーロッパからも 90~95%減ったそう。そして最近、ようやく復活の兆しが出てきているとか。



(市街の道路からピラミッドが迫る)



(熱気がすごいクフ王のピラミッド)



(一つの石がとても大きい！)



(第 2・第 3 ピラミッドとスフィンクス)

午前中はギザの 3 大ピラミッドを観光した。まずはクフ王のピラミッドから。偉大なその姿の前に立つと、まだ朝だというのにすごい熱気であった。時差ボケもあったせいか、すっかり午後 2 時頃かと思い込んでいたが、まだ 10 時前であった。ひとつひとつの石の大きさに圧倒されながら、5~6 段を登って写真をとってもらった。本来、ピラミッドは表面を化粧石で覆われていたそうだが、その面影はカフラー王のその頂上部分に残されるのみとなってしまう。5 千年も経ってしまったのは仕方がないが、他の部分はよくもその間破壊されなかったものである。クフ王のピラミッドは 1 日に 300 人しか入れないとのことで、われわれは一番小さい第 3 ピラミッド（メンカウラー王）に入った。内部は思いのほか湿気が多くムッとした。階段の天井が低くて苦勞して入った割には大したことなくて、カッパドギアの地下都市遺跡の方が面白いと思った。内部に入るのなら、やはりクフ王のピラミッドがよかったなあ。

各々のピラミッドの周りには、ラクダに乗った警官がパトロールしていた。ラクダに乗って写真撮影をしてもらったが、ほんの一瞬写真を撮るといった感

じで、もう少し歩き回って欲しかった。現在エジプトのラクダは、スーダンから輸入されているとのことであった。



(警官の乗る白いラクダはカッコよかった)



(写真撮影だけ～)

3大ピラミッドの方からカイロ市内を見渡すと、砂塵に霞むのか、市内が蜃気楼のように見えた。また、各ピラミッドの周囲には大きな木製の看板のようなものがあつたが、これは日陰を作るためのものだそう。

クフ王のピラミッドの裏には船の形の博物館があり、死後、王が川を渡って旅ができるようにとの目的で周囲に埋められた船が保存されているとのこと。2艘発見されていて、1艘はまだ修復中とのことであった。

第2ピラミッドの裏にあるスフィンクスと河岸神殿の前で集合写真を撮った後、各々を見学した。スフィンクスというのはギリシア語で、その方向はちょうど真東を向いているとのこと。何年か前に、エジプトの学者があと数年でスフィンクスが崩壊してしまうと発表したけど、それは政府の観光対策に後押しされた発言で（壊れるとなると観光客が焦ってやって来る？）、その後フランスの学者が調査したところ、まだまだ充分にもつという結果だったそう。

その後、オリンピックで山下泰弘と対戦して敗れたラシュワンさんが経営するパピルスの店を訪れ、買い物タイムとなった。NHKで放送された「おしん」はエジプトで大人気になり、放映中は街中を歩いている人がいない位だったそうであり、小林綾子がこの店を訪れた際の写真が飾られていた。ラシュワンさんはそのフェアプレーが評価されて、エジプトでも人気が高いと言う。

昼食は地中海の幸というメニューであり、小さなエビやイカとかで、期待した魚はなくて美味しくなかった。先ほどの集合写真であるが、心霊写真のようになってしまい失敗であった。1枚だけ現像されてきており、あみだくじで僕がそれをゲットしたが、気持ちが悪いし廣川さんに差し上げてしまった。

午後の観光はダハシュールから始まったが、この付近は軍事施設があつて、以前は観光不可だったそう。途中、戦車を運搬する超大型のトラックと数台すれ違い（戦車は載せていなかった）、軍事基地が近いことを感じさせた。ハトさんがエジプトの兵役について、とても辛かったと言っていたが、トルコのガイドさん（イルファン）も同じように2度と嫌と話していたのを思い出した。

ダハシュールでは、クフ王の父であるスフネル王が建設させたと言われる赤のピラミッドと屈折ピラミッドを見た。前者は構成している石は小さめだがきれいな形をしており、後者は少し不恰好に思えた。



(形の美しい赤のピラミッド)



(不恰好な形の屈折ピラミッド)

続いてメンフィスに向かった。ここにはラムセス二世の像が横たわっており、それを屋根付の建物が覆っていた。発見された時に左側が下になっていたため、左半身は損傷が見られた。外にはラムセス二世の像とスフィンクスやその他千年以上も前の遺跡がいくつも置いてあった。何か、無造作にといった感じで置かれていた。



(ジャイアント・ロボを思わせるラムセス二世の像は大迫力！)



(ラムセス二世の立像とスフィンクス)

エジプトの識字率はおおよそ 50%で、カイロでは学校へ通う児童は 80%だが、

地方になると 20%くらいになってしまい、学校へ行かない子供たちは農作業を手伝ったり、カーペットスクールに行ったりする。というような説明があった後、アクナトン・タペストリー・スクールに立ち寄った。ここでは7～9歳くらいの子供たちが絨毯を織っていた。子供は目がいいし、手も小さいので、早く・上手に仕事ができるのだそうだ。その手さばきは習熟していて見事であったが、少し複雑な思いがした。



(絨毯を織る子供たち—キュートな女の子もいたが、日本ならアイドル候補?)

サッカラでは BC2,800 年に造られたジェセル王の階段状ピラミッドを見た。エジプトに 98 コあるというピラミッドの中で最も古いというが、いかにも最古といった感じのピラミッドであった。ハトさんに言われて、ここで少し砂を採って来た。細かくてサラサラした砂であった。



(いかにも最古を思わせる階段状ピラミッドと発掘中の遺跡と柱廊)

ナイル川の水を引いた運河では、泳いでいる子供たちを何人か見かけたが、近くにゴミが捨てられているような所で、衛生的とは言えない環境であった。また、なつめヤシが多く見られ、この実は安価だが栄養価が高いので、貧乏な人の食べ物とも呼ばれることがあるそうだ。

1 日目のカイロ市内観光が終了すると、カイロの空港に戻った。途中、お墓が続くところが数キロに亘って続いていたが、お墓には屋根があつて、貧しい人たちが住み着いてしまうこともあるとか。また、埋葬されたばかりの死体を盗んで医学生に売りつける者もいるという恐ろしい話を聞いた。

空港に到着して搭乗用のバスを待っている際に、暑さと睡眠不足で頭がボーッとしていたせいか、後ろに並んでいた女性からリュックのファスナーが開い

ていることを指摘されてしまった。その親切な女の子はアメリカのニューメキシコから来ており、5～6年前に日本でホームステイをしたことがあるという。四国ということらしいが、何県だか分からないといういい加減さであった。覚えている日本語はあるの？と質問したところ、“阪神タイガース！”ということなので、思わず許してしまった。一路ヨルダンへ！

機内では、赤ちゃんを連れた真っ黒なアラブの衣装をまとった女性が、少し前に座っていた。この暑いのに手袋までして、顔もスカーフで隠して目だけを出していた。ヨルダンでは様々な民族衣装をまとった女性を見かけたが、これらは宗教への信仰度の違いによって生じるらしい。

21 時 15 分にアンマンに到着した。両替をしてからホテルに向かった。空港から市内に続いている街灯のオレンジ色が美しかった。バスは小型になったけれども、ツアーの皆さんとは親近感を覚える距離になった。ガイドのサミーさんから、ヨルダン名物の砂細工のプレゼントがあった。

ヨルダンには日本語を話すガイドがいないとのことで、サミーとサブガイドのオマールとも英語での案内となり、添乗員の北村さんが通訳してマイクを握った。ホテルはヨルダンで一番のインターコンチネンタルで、朦朧とした頭で遅い夕食を摂った。

8 月 13 日（金）

7 時にモーニング・コールがあり、すぐに朝食に行った。このホテルは改装中らしく、朝早くから職人さんが動き回っていた。待てよ、金曜日はイスラムの休日の筈なのに・・・と思った。



（インターコンチネンタルとヨルダン市内の風景）

エジプトに比べヨルダンの方が幾分涼しいと聞いていたが、その通りで快適であった。また、サブガイドのオマールさんは優しそうなので、早速ロビーで話しかけてみると、見た目通り人懐っこくて会話が弾み、以来とてもフレンドリーに過ごした。

8 時 30 分にロビーに集合して出発した。バスはキングス・ハイウェイを進んだが、なだらかな丘陵に低い灌木が植えられていて、どれ位するとこれらが高

く聳えるのだろうか？ 30年位したらまた訪れてみたいなあと思った。

ネボ山は標高 800mで、「神との約束の地」カナン（エリコ）を目前にして倒れた預言者モーゼの墓があると信じられているという。山の上からは、どこまでも続く不毛の大地と遥か彼方には死海の一部とエリコの町も見渡せた。この辺りが、シリアからアフリカのモザンビークまで続く“大地溝帯”に含まれていることを実感させる風景であった。バックグラウンドの青空がとても高いように感じた。



（エリコの町や死海も見渡せる壮大な風景とモーゼの十字架）

へビが巻きついたようなモーゼの十字架を見てから、修道院内に入った。



（ネボ山にある修道院とその内部）

ここは継ぎ足し継ぎ足しで建てられていて、あの辺りは何世紀、この付近は何世紀と、サミーさんが説明してくれた。また、様々な動物やエキゾチックな人物の躍動する姿が画かれたモザイクは結構きれいで、以前見た敦煌の壁画とど

っつの価値が高いのだろうかなどと考えてしまった。



(修道院のモザイクとモーゼの墓があるという記念碑)

ネボ山から 100m 下ったマダバは人口 9 万人の町で、旧約聖書にも名前が出てくるほどの古都で、その中心にある聖ジョージ教会はモザイクで有名である。AD560 年に造られたという最古のパレスチナの地図がモザイクで床に張られているのだが、残念ながら一部は剥がれ落ちていた。しかし、エルサレムの中心を通る道も描かれていて、街の再建時にはこのモザイク画を参考にしたというし、死海もしっかりと描かれていて、魚が死海の手前で U ターンしてしまうという（死海は塩分濃度が高すぎて、魚は生息できない！）リアルというかユーモラスな仕上げになっているのが印象的であった。



(聖ジョージ教会。モザイクは天然の岩石が使われているという)

次はいよいよ死海である。その途中で、海拔 0 メートルのところで写真を撮った。



(海拔 0 m 地点)

海面下 400mにある死海の沿岸に進むと、レストランとおみやげ店、それにプールまで備わっているレストハウスのようなところに連れて行かれた。ここには日本旅行の“ヨルダン・カイロの旅 8 日間”のグループがすでに来ていたが（総勢 20 名位であった）、あちらのツアーは日程がきつそうで、JTB にしてよかったと思った。

簡素な更衣室で海パン・ビーチサンダル姿に変身して、すぐさま水の中に入った。温かくて、水というよりお湯といった感じで、温泉にでも浸かっている気分になった。身体がフワフワ浮いて快適であった。ちょっと沖の方に行くと、もう足が立たず、下の方の水は冷たかった。塩分が強いだけに、ひげそり後と指のささくれが痛かったが、泳ぐという作業がないので全く心地よく、浮遊しながらいろいろなことが頭を巡った一向こう岸はイスラエルだけど、泳いでいったら捕まってしまうかな？ 捕まる前に撃たれてしまうかな？ トルコで一緒だった西さんと野津さんは今頃 NY へ向かう機内で退屈してるだろうなあ…。



（浮遊体験は超快適です！）

堀内さんは浮きながら新聞を読んでいるところを写真に収める、といって新聞を用意してきたが、体制を崩してしまい撮影前に新聞を濡らしてしまった。そういえば死海観光の PR 写真にそんなのを見た覚えがあったが、残念であった。僕は死海の水を持って帰ろう、と用意した“なっちゃん”のボトルにしっかりと詰め込んだ。

また、外国人たちが死海の底から泥を採り、肌に塗って“パック”を始めたので、われわれも真似して。腕や腹などに塗ってみた。こんな所までやってきたのだから、何か効果が出て欲しいと思った。

塩分濃度が 25%もあるため、15 分以上は入らないようにという北村さんの注意をしっかりと守って、プールで少し泳いで塩分を落とし、さらにシャワーを浴びた後に昼食となった。久しぶりの運動の後だけに、ビールが美味しかった。

ホロ酔い気分でバスに揺られると、40 分程で死海の水を原料にした化粧品を売っているという店に到着した。ごく普通のおみやげ店であったが、民芸品が

たくさん飾られていて、ちょっとエキゾチックであった。その雰囲気に向けておみやげ用に泥のパックを購入し、また、内山さんとともにお揃いのアラブの民族衣装を買ってしまった！



(死海名物の泥エステ？)



(アラブの水パイプ)

その後は一度のトイレ休憩をはさんで、バスは不毛の大地を一路ペトラに向かった。この間の風景は将に“不毛”という言葉がピッタリの感じで、これは中国のゴビとは少し違った雰囲気で、左右に堅そうな砂漠が広がっていた。ヨルダンは国土の 82%が砂漠であるというが、石油資源もなく、観光産業が大きな柱となりつつあるという。

途中、ワディ・ムサというところのモーゼの泉を見学した。モーゼが地面を杖で叩くと泉が湧き出たという伝説があり、以来、長きに亘って滾々と水が沸き続けているという。この水場には現地の人がたくさん水を汲みに来ていたが、現在でも生活に欠かすことができない重要なスポットである。とてもヒンヤリとした感じがした。



(アラブの衣装はその後一度も着ていない～) (モーゼの泉～オマールとツーショット)

石造りのお洒落なレストラン **Taybet Zaman** で夕食となった。**Zaman** というのは昔という意味だそう。内山さん・廣川さんと白ワインのボトルをオーダーしてシェアした。ヨルダンはどこも料理が美味しく、特にスイカが甘くてデリシャスであった。また、ヨルダンのビールはオランダとの事業提携をして造

られた会社の AMSTEL という銘柄で、中々美味しかった。

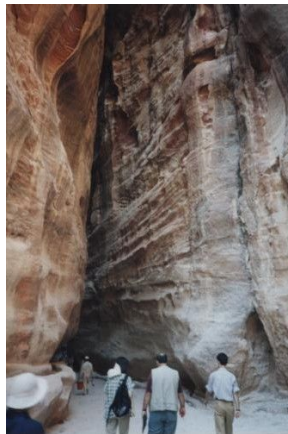
この夕食時に、ツアー参加メンバーの自己紹介が行われた。8 名という少数のツアーなのでお互いの名前はすぐに覚えたが、堀内さんは横浜、山本さんは名古屋、内山さんと廣川さんは新潟から参加されていた。いろいろな地域に分散していて、さすがヨルダン！という感じであった。

8 月 14 日（土）

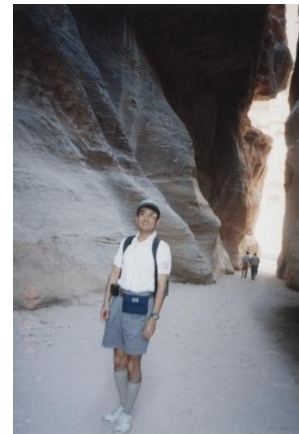
ヨルダン旅行のメインである『インディ・ジョーンズ～最後の聖戦』の舞台になったペトラのバラの神殿を訪れる日となった。気合を入れて半ズボンで臨み、8 時半にロビーに集合して徒歩で出かけた。まず、900m の道のりを馬に乗って進むのだが、白い馬がいいなあと順番を待っていたら茶色のやつに当たってしまい、ちょっと残念であった。



（馬に乗ってジャリ道を進んだ）



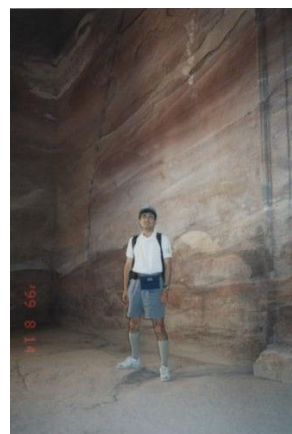
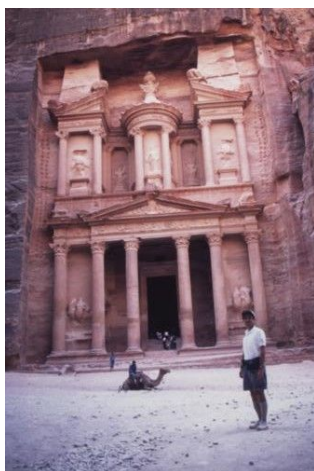
（高い岩壁が迫るシークは迫力満点！）



回廊（シーク）に入り、高い岩壁が間近に迫ってくると、徐々に神秘的な雰囲気漂ってきた。この岩壁は高い所では 100m を超えるというが、2 km 近くも歩くと、サミーさんから背の順に並んで、手で前の人の肩をおさえて（ムカデ競争の体勢）目を閉じて歩くように言われた。目を瞑って『インディ・ジョーンズ』のテーマ曲を思い浮かべながら、ゆっくりと頼り無く進み“Open！”の声で目を開けると、バラの神殿エル・カズネが視界に入った。大掛かりな演出の割には、“ああ、これかあ”といった印象であった。パンフレット等で幾度も目にしているし、思ったより観光客が多かったせいかもしれない。観光客が増えたのは『インディ・ジョーンズ』以来というが、自分もその影響を大きく受けているので文句を言える筋合いではない。しかし、その大きさに圧倒され、どうしてこんなシークの先に！…という感じを持った。さすがナバティア王国の首都、といったインパクトであった。神殿とか墳墓とか言われているが、やはりここは砂漠の盗賊たちの宝物の隠し場所が相応しいなあ、という感じになった。奥行きは無いが、もしかするとこの奥に、映画のようにキリストの聖杯

が隠されているのではないか、という気持ちになった。

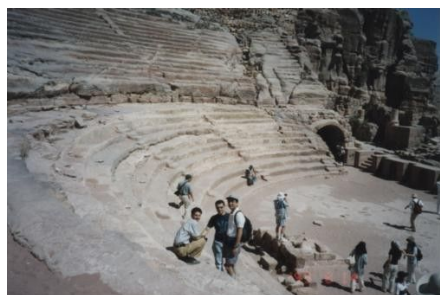
その後、ペトラ遺跡を歩いてじっくり巡った。



(シークを抜けてエル・カズネに到着。天然の岩模様が美しい)

少し進んでローマ劇場に辿り着いたが、このようなシークの奥に大勢の人々が住んでいたことが窺われ、不思議な感じがした。また、王家の墓のなかで最大のアーン(An)の墓は、天井の模様がカーペットのように美しかった。その所々にススけて黒くなっている部分があったが、10年くらい前までベドウィンが居住して火を使用したためということであった。

ニンフェウム、列柱通りを見ながらレストランに到着した。昼食は屋外であったが、ハエとハチが騒がしかった。



(昔の人々はローマ劇場では何を観たのだろう。宮殿の墓と広い列柱通り)

昼食後は千段近い(800数段?)という階段を登ってエド・ディルまで歩いた。ロバに乗っていく方法もあるのだが、少し前に奥様が訪れたという堀内さんから、ロバに乗ると怖くて景色を見ている暇もない、とのアドバイスを受けたので歩くことにした。われわれは徒歩であったが、オマールがロバで登った。

ロバの糞に気をつけながら汗だくになって登っていくと、だんだん見晴らしが良くなっていった。途中、多くの外国人たちと出会ったが、ほとんどが“Ciao!”と声を掛けてきた。陽気なイタリアンが多いのかなぁと思った。そしてエド・ディルの修道院が目に入ったときは、こんな山の上によくぞ造ったものだ!と

大感動した。エル・カズネのときと違って、全く不意に現れた巨大建造物に驚かされた。



(エド・ディルまでの道のりは最高で、不意に現れた修道院には大感激！)

エド・ディルの修道院のさらに先に向かって外国人たちが歩いていくので、その後に従って進むと、見晴らしの良い大きな岩の上にイタリアンたちがおとなしく座っていた。陽気なイタリアンがどうしたのかなあ、と思いながら“Ciao”と挨拶したところ、意外にも“シーッ”と言われてしまった。ちょっと変わった空気を感じていたが、全く異様な雰囲気であった。その中のリーダーと思われる男から“Do you speak English?”と質問されたが、思わず首を横に振ってしまった。その場には北村さんもいて、二人で顔を見合わせてキョトンとしていた。儀式？の終了後に彼から説明を受けたが、2分間‘黙祷’するとグッシャーラの神の声が聞こえるという。この異様な雰囲気を前にして、僕はノストラダムスの大予言に記されていると言う「グランド・クロス」に因んで、UFOでも呼ぶんじゃないのかな、と一瞬思ったが…

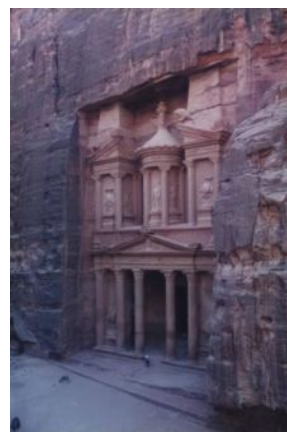
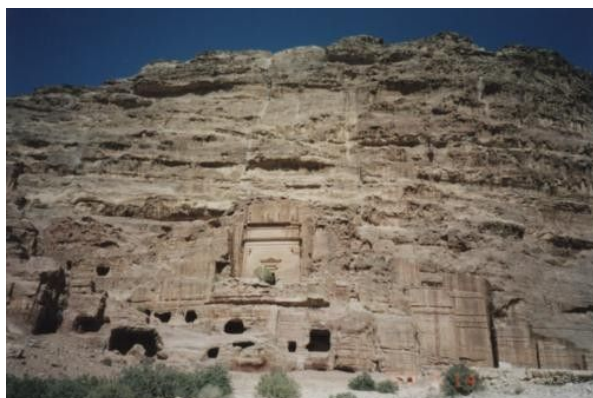


(エド・ディルから更に進んで、グッシャーラの声聞けるという所まで至った)

海外で“シーッ”と言われるのは、トルコの聖母マリアの家に入るとき以来2度目である。前回はおのれの煩悩を振り払うためにロウソクを購入してお祈りしてきたけれど、今回は屋外で何も無いのでバツが悪く、彼らが去るのを待つしかなかった。反省の意味を込めて、自らも2分間黙って耳をそばだててみた

が“神の声”は聞けなかった。しかし、そこからの眺めは誠に圧巻であり、山々の岩肌が高い青空に映えていた。帰りは道が見つからなくなってしまったり、2度ほど迷いかけてしまったり、ちょっと怪しい足取りとなった。途中で出会ったイタリアンのカップルと話しながら石段を下ったが、早速グッシャーラの神の声について尋ねてみた。残念ながら彼らは聞こえず、代わりに風の響き（エコー）が聞こえたとのことであった（それならば僕も聞こえた）。話題がサッカーのことになると、自分たちはミラノなので AC ミランのサポーターであるが、中田はグッド・プレイヤーであると興奮して話し始めた。また、アカバでスノーケリングをしたところ、赤や青といったきれいな色をした魚がたくさんいてとても感動したとのことであった。

彼らとはレストランのところで別れて、後は一人でブラブラと遺跡を眺めながら歩き廻った。エル・ガズネの少し手前で北村さんと会い、二人でゆっくりと進んだ。夕陽を浴びたエル・カズネは、午前とは違った美しさをかもし出していた。午前よりもバラ色に近くて綺麗に思えた。



（王家の墓と午前とは異なる雰囲気のエール・カズネ）

シークを抜けて再び馬にのったが、下馬時に前もって支払用に渡されていた\$3（US）ではなく\$10を払えと言われた。言葉（英語）がわからない振りをして誤魔化そうかと思ったところに北村さんも馬で戻ってきた。奴らに言わせると、予定よりもかなり待たされたので。余計に金を払えということらしい。北村さんが粘って掛け合ってくれ、僕は\$3手渡して先にホテルに戻った。

ホテルの近くで、アーン墓付近で出会ったアルゼンチンから来た4人家族と遭遇してしまい、長話をしてしまった。彼らとはエド・ディルでも出会ったので3度目の邂逅となる。最初の時、彼らはマラドーナを知っているかと聞いてきてアルゼンチンの自慢をしていたが、南米のあんな遠くからヨルダンそしてエリコに向かうというが、凄い家族旅行をするなと思った。3回目のこのとき、30～40代の男はアルゼンチンでは通常1ヶ月の夏休みを取るが、自分は仕事が忙しくて2週間しか取れないと嘆いていた。彼らは昨日アカバからワディ・ラ

ムを巡り、明日は死海、アンマンまで行って、その後エリコに向かうと言う。僕は日本の夏休みの状況（2週間も取れない！）や昔、文通していた子が住んでいたアルゼンチンのメンドサ市についての話をしたりし、結構長く話してしまった。

ホテルに戻ってシャワーを浴びた後、1Fの砂細工の店を冷やかしに行った。砂細工の作製実演を眺めていると、二人のホテルマンが自分の日本名は田中だとか何とか怪しいことを言って近づいてきた。彼らとは仲良くなり、種々の会話が弾んでしまった。彼らは是非おみやげに砂細工をと勧めてくれたが、キャッシュ（ヨルダン・ディナール）の持ち合わせが無いのでと断った。すると、タクシーでちょっと行けば VISA カードのキャッシュ・サービスがあると言って、盛んにけし掛けて来たが、面倒臭いし、カードが使えれば買うと言って断った。砂細工のおやじは、これらの作品は 43 種類の砂を用いるが、そのうち 38 種類がペトラのものだと自慢していた。

ホテルのレストランでの夕食時、先ほどのホテルマンの一人（Abdulla）から声を掛けられて握手をしたが（笑）、北村さんから“いろんな人たちとすぐ親しくなるのは鹿島さんの特技ですね。きっと前世はラテン系の人だったのでは”と言われたが…そうかもしれない！

夜、早めに眠ろうと思ったが外が騒がしかった（特に車のラジオが煩かった）のでフロントに文句を言ったところ、部屋がチェンジとなった（152→141 号室）。TV では『アポロ 13 号』をやっており、アラビア語の字幕が邪魔であったが、最後（12 時近く）まで観てしまった。

8 月 15 火（日）

昨夜、部屋のチェンジの際に、モーニング・コールを間違えないよう強く言ったのに、すっかり忘れられていたが、何とか時間通りに目覚めることができた。昨日ペトラ遺跡を訪れる際に、馬に乗った写真を撮影していたが、何だかんだで買い忘れてしまい、朝食前に辺りの店に行って聞いてみたが、結局わからなかった。廣川さんからよく写っていたと言われたので、ちょっと残念であった。予定が少し変更になり、アンマンでは考古学博物館を見学しないことになったので、朝の出発も 9 時と遅めになった。

さて、ヨルダン観光も佳境に入ってきた。今日はワディ・ラムの岩砂漠をドライブして『アラビアのローレンス』気分を味わう日だ。

ホテルを出発したバスの中で、ヨルダン人の平均寿命は男が 70 歳とかの話が出てきた時、サミーさんに年齢を聞いてみた。な、なんと！僕と同じ歳だって！全くビックリしてしまった。1957 年 12 月 12 日生まれだという（腕に刺青で 1957.12.12 と彫られていた）。自分は '58 年の 1 月 3 日だと告げ、“Near”

“same age, my class mate”などと話し始め、少し怖い感じがしたサミー（同じ歳なので敬称は略）とも、しっかり仲良くなった。でも、あの頭とお腹で同じ歳とは！ もの凄い貫禄！ サミーより少し誕生日が遅くて、ちょっぴり救われた思いはあった。すかさず北村さんから“日本人は幼く見えるようです。私なんかも、よく学生と間違われます〜”と、どさくさに紛れた、ちょっと図々しい説明があった。また、オマールは明日 25 歳になるという（こちらは数え歳だから‘75.8.16 生まれか？）。サミーは“Happy birthday to you”と陽気に歌い始めてしまった。しばらく走ってから、屋根付きの 4WD に乗り換えた。



（同じ歳の二人です！この頭とお腹はもの凄い貫禄。ベドウィンたちと知恵の七柱で）

いよいよ砂漠を 4WD で走る時がやってきた。“砂漠を楽しめる者は 2 つしかない。ベドウィンと神々だ！”と『アラビアのローレンス』の中のセリフにもあるが、その砂漠を楽しんでしまうのである。考えてみれば神をも恐れぬ大胆な行為である。僕はちょっと興奮していたが、サミーの説明を聞きながら線路を越えていくと『知恵の七柱』が目に入ってきた。この岩山はローレンスの自伝のタイトルになっているものであり、北村さんに言われて、ここでは僕がガイドになって説明した。



（ローレンスの泉）



（ラクダは前足を紐で縛られていた）

レストランを越えると、もうそこには道は無く、赤茶けた砂が広がっていた。少し進むとローレンスの泉に到着した。ここは、ファイサルのカンパがあった

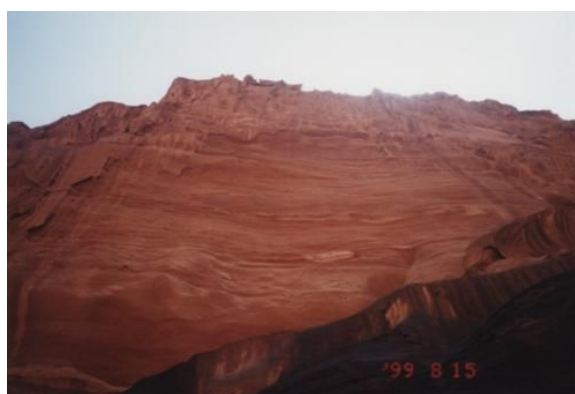
て、トルコ軍の飛行機に攻撃されるシーンに出てくる場所ではないかと思ってサミーに質問したが、彼は『アラビアのローレンス』を観ていないと言うことであつた（オマールも観ていない）。仕事なんだから、それくらいしっかり抑えて欲しいと思った。この辺りではベドウィンによってラクダが飼われていて（ちょっと痩せていた！）、逃げ出せないように前足を紐で縛られていた。

その後ベドウィンのテントに入って、甘い紅茶をごちそうになった。われわれの 5 倍くらい砂糖を入れているようであつた。遊牧民にとって、砂糖は大切な栄養源の一つになっているのではないかと思われた。女性陣は炊事場があるという異なるテント（男子禁制）に行った。山羊の毛で作られているというテントは、涼しくて気持ち良かった。Water proof であり、冬は暖かいという。テントの中央には囲炉裏のような火を使用する場所があつて、周りは石で囲まれていた。



（ベドウィンのテントとロケ中の岩山とナバティア人の絵文字）

再び 4WD に揺られて岩山の近くで止まった。TV か映画のロケをやっているような人たちの横を抜けて進むと、内部のシークにはナバティア人の絵文字が残されていた。外側にもあつたのだろうが、内側は風化されないで残ったのであろう。



（ロープを下りるときが恐かった。赤茶けた岩壁は神秘的であつた）

さらにその先に進んでロープを上っていくと、そこは赤い岩壁が美しく輝いており、神秘的な雰囲気が出た。2～3 人の外人がその辺りをウロウロしていたが、それより先は進めないと言うのですぐに下りてしまった。下りる時はと

でも恐くて、ペトラに住んでいるという現地の人に助けられてようやく下りることができた。よく見ると、このワラのロープは弱々しくて頼り無いものであった。



(赤茶けた砂漠を4WDで進み、サミー&ベドウィンのドライバーとの会話が弾んだ)

その後ワディ・ラムに戻ったが、ドライバーがわざとスリリングなジグザク運転をして喜んでいたら、なかなか面白かった。また、ドライバーとサミーがベドウィンの歌を歌い出し、われわれも手拍子をして盛り上がった。途中、写真撮影のために一時停止した後、レストランで昼食となった。

昼食の際に、外国人観光客が口笛で「インディ・ジョーンズ」のテーマを奏でたのに刺激されて、先ほどのベドウィンの音楽を忘れないようメモ帳に5線譜を引き、しっかりと記録した(歌詞が分からないのが残念!)。そうそう、ベドウィンといえば、ハリス族やハジミ族、ハウエイタット族などの種族があるようだが、現在はどうなっているのだろうか。サミーに質問しようと思っていたが忘れてしまった。また、日本から持参した緑茶を、誕生日のプレゼントとしてオマールに謹呈した。



(ベドウィンのドライバーとはサミー(英語)が通訳してくれた。アンマンまでの道のり)

その後、バスは4時間かけて一路アンマンへと進んだ。途中、ラクダの横断注意という道路標識があったが、夜間はとても危険であるという。ラクダといえば、この辺りは1コブである。こちらは足の裏の構造がザラザラした砂を歩くのに適しているようで、中国などにいる2コブは岩の砂を歩くのに適してい

るとの話があった。そうか！中国の硬いゴビには2コブなのかぁ、納得！

今夜の遅い便でカイロに戻るのだが、そのフライトが大幅に遅れることになってしまった。当初22時発だったのが、深夜1時になるという。昨日、アンマンの考古学博物館を見学するために朝早く出発しなければならないが、この見学をなくせばゆっくりできる、ということでゆっくりすることを選んだ訳だが、こんなにフライトが遅れるならアカバに行きたかったなぁ・・・。

映画『アラビアのローレンス』では、ファイサルから“We need a miracle”と言われたローレンスが苦悩する、随分と深遠なシーンが出てくる。ローレンス率いるアラブ軍がオスマントルコの要塞アカバを攻略するに当たって、海に向かっている大砲は陸地には反転できないから、ベドウィンさえも困難な灼熱のネフド砂漠を越えて、アカバを陸から攻めることを決断する場面である。

悩み抜いたローレンス中尉“Aquba” “Aquba from the land”と言うところは感動的だ。言葉が少ないだけに重みがあって、これは「Today, we celebrate our Independence day！」と演説する『インデペンデンス・デイ』の大統領のセリフと同じくらいの感動を覚える。それにしても、ひと目アカバの海が見たかったなぁ・・・

1回の休憩をはさみ、18時過ぎにアンマンに到着した。アンマンは当初7つの丘からなっていたとのことであるが、7つの丘といったら、ローマもイスタンブールもそうである。何か特別な（宗教的な？）意味でもあるのかなぁ。



（気持ちよい風が吹くアル・カラの丘からのアンマン市内の展望と修復中の遺跡群）



まずはアル・カラの丘の上にある城塞を見学したが、市内の展望ができ、風が気持ちよかった。ネオンや看板がほとんど見られず、歴史ある街のように感じられた。風といえば、市内のあちこちから凧（カイト）が上がっていた。真

夏に凧なんてちょっと違和感を覚えるが、この街の爽やかな風には、むしろ夏の夕方が相応しい気がした。ウマイヤ家の別荘だった建物などの説明を受けたが、飛行機（セスナ）が後ろに広告をなびかせて低く飛んでいるのが印象的であった。

ローマ劇場に着いた頃は薄暗くなっていた。現在でもこの劇場で様々なイベントが催されているようで、明日からはボクシングの大会があるとかで、アリーナ（1階）にはリングが作られていた。昔の川崎球場のように勾配がきつくて、上り下りが怖かった（特に下りが）。この劇場の上の方からは、美しい三日月が見えた。



（ローマ劇場と市内から見たアル・カラの丘）

その後、アンマンの市内散策となった。中心街を歩いて、いろいろなお店を見て周った。ドネル・ケバブの焼けるいい香りがして食欲をそそられたが、夕食が近いので我慢した。ちょうどお菓子屋さんの前にいたら、地元の子供がパンをつかんで逃げていく万引きの場面を目撃してしまった。また、今まで車の排気ガスから遠ざかっていたので、この街の車の多さが気にかかった。



（ヨルダンでは食事が美味しかった！ 駐車場には高級車もたくさん見られた）

夕食はペトラのレストランと同系列の **KAN ZAMAN KERAK** という立派なところであった。初め地元の人が集まる大衆的な棟をサミーが案内してくれたが、そこでは地元の民族音楽が演奏されていて、ドネル・ケバブのいい匂いが漂っていた。われわれの食事はちょっと高級な棟で、生演奏もあったが落ち着いた

た雰囲気があった。 シシケバブをはじめ、ヨルダン最後の夜はとても美味しいディナーとなった。

このレストランには種々の店があり、オマールとともに見て廻った。また、入り口にはこのレストランに来店した VIP の写真が飾られていたが、故フセイン国王の 4 番目の妻ヌール妃はとても 50 歳とは思えない美しさであり、思わず溜息が出てしまった。通常アラブ系の人には加齢によって太ってくる（と思う）。どうしてヌール妃はスリムなのかとオマールに尋ねたら、彼女はアメリカ人だから、という回答だった！？

イスラムは 4 人までの妻帯を認めているが、最近ではそのようなケースはほとんど無く、通常は 1 夫 1 婦だという。故フセイン国王もキチンと別れてから再婚されたとか。渡辺淳一の『反常識講座』の中に“1 夫 1 婦制が崩れるとき”というのがあって、日本において、この制度が崩壊するのは時間の問題かもしれないと書かれているが（忙しさとストレスで覇気を失った男たちにとっては 1 妻多夫が相応しい！？）、どうなることでしょうか。

さすがにリッチなレストランだけに、ベンツやらアメ車やらが多数駐車されていた。それらのナンバー・プレートには数字の他にアラビア数字も記載されていて、5 は 0 になるのか、などと納得するやら戸惑うやらして過ごした。夜も遅いのにレストランには子供も多くいて、不思議な感じがした。

23 時半までレストランに滞在した後、空港に向かった。フライトが遅れた分、おしゃれなレストランに長居できた訳だが、なんと、さらにフライトが遅れてしまうという。空港での長い待ち時間は、オマールや北村さんと話をして潰した。オマールからは、自分が撮ってあげた写真が上手く写っていたら送って欲しい・手紙をくれと名刺を渡されたが、それはアラビア語表示のもので、慌てて英語で書いてもらった。彼は、アラビア語はアルファベットが 28 文字しかなく簡単なので、ぜひ覚えてアラビア語で書いてくれと言っていたが、そんなことは絶対に無理だと話した。

横に座ってノート PC を使用していた綺麗な外人のお姉さんも、フライトの遅れで苛立っているようで、文句を言いながら盛んに僕に話しかけてきたので時間潰しになった。1 時半近くになって、ようやくフライトの改札が開始された。ヨルダンで開催されたアラブのスポーツ大会が大幅に遅延し、その影響でアンマン発の MS815 便が離陸したのは 2 時 15 分を過ぎていた。4 時間以上の遅れとなった。エジプトに戻らず、ヨルダンに長〜く居たいなあとの僕の思いは、意外な形で実現してしまった。

もしアンマンに戻らないで、映画のようにシナイ半島を横切ってカイロに向かったとしたらどうだったのだろうか。もしかしたら飛行機より早く着いていたかもしれない！

3時35分にカイロに到着となった。思い足取りで入国手続を済ませて、バスに乗り込んだときには少し明るくなりつつあった。ホテルではすぐにシャワーを浴びたが、その最中に3度電話のベルが鳴ったが、疲れてと眠気が出る気力も無かった（どうせ北村さんからの電話かと思ったが、実際そうであった）。結局眠ったのは6時近くとなった。

8月16日（月）

8時45分にモーニング・コールがあったが、その少し前には目覚めていた。山本さんの部屋には間違えて6時45分にモーニング・コールがあつて。ほとんど眠れなかったという。朝食後、10時半にフロントに集合してガイドのハトさんとともに出発した。ヨルダンのような爽やかな風が無く、エジプトは暑く感じた。

エジプト考古学博物館はとても混雑していて、騒がしい感じがした。JTB 特製のイヤホン・ガイドでこの中を巡ったが、まずはロゼッタ・ストーンのコピーから見た。複製の物はこれだけで、この博物館にあるものはすべて本物とのこと。以前、大英博物館も行ったけど、あの時は一人だったので説明がなくてよくわからなかったなあ、などと思っていると、次から次へとハトさんの案内が始まった。



1階ではこの他、4千年もの前の色が残っている座像に驚かされた。2階に上がり、ツタンカーメンの黄金のマスクや金箔の玉座、ミイラやら種々の装飾品やら、これでもかという感じで見学が進んだ。一つだけでも凄いのに、一度にたくさん見せられて頭が少し混乱してしまった。何と云っても世界の遺跡の3分の1がエジプトにあるというのだから大したものである。しかし、今回の僕の観光エネルギーはヨルダンで使い果たしてしまい、ストックが無くなっていたので、混雑の中の見学は少し厳しかった。人影が少ないところでは、若い警備員からストロボを使用して写真撮影してもいいと声を掛けられたが、どうせお金（チップ）を要求されると思い断った。

続いてモハメッド・アリ・モスクを訪れた。まずはコンコルド広場のオベリスクと交換したという時計の説明があつた。当時（1845年）としては時計の方

が価値が高かったそう。現在は故障して止まったままだという。外見は地味な感じがしたが、内部に入ってみるとトルコのブルー・モスクと同じような感じで、アラベスクの美しい模様で圧倒されてしまった。因みに、このモスクの設計者はブルー・モスクと同じ人であるという。



(モハメッド・アリ・モスクとカイロ市街)

モスクに入る前に、例によってイスラム・スタイルのお祈りの説明があった。洗浄やお祈りの姿勢などは医学が未発達の時代に、衛生環境の向上とストレッチ運動による医学的な効用をもたらしたに相違ない。1日5回のお祈り（ストレッチ）をこなせば、少なくとも寝たきり老人にはならないであろう。お祈りができる人は健康なのだから、宗教（信仰心）と医学が結びついていたことが窺われる。

モスクに入る手前で“これは水道橋です”というハトさんからのガイドがあり、続いて“水道橋の次はなんですか？”との質問が出された。僕は半信半疑で“御茶ノ水！”と答えたら“ピンポ〜ン”。北村さんから“鹿島さん、冴えてますね〜！”と喝采されたが、“飯田橋”と答えた方が良かったかな、などと考えてしまった。



(モスクの内部はちょっとカイロにいることを忘れさせてくれる落ち着いた感じ)

昼食は中華料理で、ハトさんもお推薦ということで期待していたのだが、味のはっきりしなくて残念であった。ハトさんといえば、日本にも度々来たこと

があり、六本木と渋谷が好きで、秋葉原での買い物も慣れているようであった。

その後、ドアミラーが取れていたり、かなりのボンコツが多く走ったりする道路を抜けて、ハンハリーリ・バザールに到着した。入り口付近はトルコのグランド・バザールのようにおみやげ店が多かったが、奥に進むに連れて食料品が多くなってきて、敦煌の自由市場のような感じになってきた。例によって何も買い物はせず早めに入り口付近に戻ると、北村さんやハトさんたちがテラスで休んでいた。僕も名物というマンゴージュースを飲んだが、ツブツブが大きいのが残っていて、ストローに引っかかって飲み心地が悪くなく、また、舌にピリッときて、今いちの感じであった。また、この時、グローバルの添乗員の宮崎さんも同席したが、グローバル旅通信の8月号に僕の作品「鳴砂山の満月」が載ったとか、生稲さんによろしくとかの話をした。



(ハンハリーリ・バザールにてマンゴージュースを飲む。北村さん・堀内さんと)

17時半頃ホテルに戻り、シャワーを浴びたり荷物整理をしたりして、19時半にロビーに集合してナイル川ディナークルーズへと出発した。廣川さんから、せっかく買ったアラブの衣装をぜひ着て行くべきだと言われ、ちょっと迷ったが面倒なのでやめにした、しかしアラブの衣装なんて着る機会もないので、やはり着ていけばよかったと後悔した。アンマンで考古学博物館に入場しなかった分、ここでの飲み代はフリーということなので、ビールの他に例の3人でボトルの白ワインを注文した(ワインはノンフリー)。食事はヨルダンの方が美味かったなあなどと考えているうちにショーが始まった。



(ナイル川ディナークルーズとお腹の辺りが豊かなベリーダンサー)

男 4 人組のダンサーの笑顔が妙に作った感じで気持ちが悪かった。また、ベリーダンスはトルコで一緒だった石塚くんから聞いた‘以前カイロで見たダンサーはおばさんだった’という話を思い出したが、豊かな体型の方が出てきて、腰（腹）の動きがよく観察できた。クルーズの方はよくわからないうちに終了していた。

8 月 17 日（火）

いよいよ最終日となってしまった。またまたフライトが遅れるということで、モーニング・コールは無くてゆっくり起床し、9 時半頃朝食を摂った。

TV（CNN）ではトルコで大地震が発生したことを報道していたが、トルコ旅行で世話になったイルファンやドライバーさんなどは大丈夫だろうかと心配になってしまった。

12 時 30 分にホテルを出発し、一路空港へ。空港内では多くの日本人観光客と出会った。3 時間遅れの MS864 便に乗り込んで、エジプトを後にした。眠ろうと思っても、興奮して中々寝付けなかった。飛行機はシナイ半島の上空あたりで一度大きく旋回したが、これは通常のルートなのだろうか、ちょっと不安になった。

インドのムンバイ上空にさしかかる少し前、窓の外には蠍座が大きく輝いて、その尾のところから上空に向かって天の川が伸びているのが目に入った。とても美しい光景であった。天の川なんて見るのは本当に久々で、思わず『2001 年宇宙の旅』のボーマン船長の“すごい、星がいっぱいだ”を思い浮かべてしまった。また、インドを抜けてベンガル湾上空に入った頃、エア・ポケットにつかまったようで、機体が大きく動いて怖かった。何ととっても、1999 年 8 月 18 日はノストラダムスの大予言の「グランド・クロス」の日だから、何が起こるかわからないよね～。

8 月 18 日（水）

バンコクには現地時間の朝 5 時ちょっと前に到着した。少し明るくなっていた。約 1 時間の休憩はコーヒーを飲んだり、免税店を見たりして過ごした。6 時 10 分に再び離陸となった。

いよいよ成田に到着である。行きと異なりマニラには経由しないので、その分早くなった。皆さんに挨拶をした後、日本時間 14 時半ころに入国手続を済ませ、14 時 48 分のスカイライナーに飛び乗り、16 時ちょっと過ぎに帰宅した。

それにしても思い出深い旅行となった。カイロでのピラミッドをはじめとする数々の遺跡や歴史との出会いは、あたかも紀元前へ時間旅行をした気分にな

った。ヨルダンの高くて青い空、荒涼と続く大地は、しっかりと目に焼きついてしまったし、ネボ山ではモーゼへの思いに触れることができたような気がする。しょっぱさや、ピリピリ感など五感すべてで味わった死海浮遊は、筆舌に尽くし難い体験であった。

異次元に迷い込んだようなペトラ遺跡、エド・ディルの修道院までのきつかった道のり、そしてワディ・ラムの砂漠ドライブ。将に『インディ・ジョーンズ』と『アラビアのローレンス』の世界へ一歩踏み入れ、夢のような時間を過ごすことができた。

今回のツアーは砂漠の暑さにも修飾され、暑い思い出となって、いつまでも残ることであろう。